

書 評

御厨 貴著『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』

(中公新書 2002年)

鳥居 史絵

フィールドワーカーとして対象となるフィールドを研究するとき、そこでの出来事を記録し、また誰かに話を聞くことで理解しようと努める。この研究方法から得られたものは、書物では得られないフィールドワーカー故の特権であることは、鳥居(2008)でも示している。本書は、フィールドワークを行うことで得た記録を、後世に伝えるための成果物であるオーラル・ヒストリーという形に仕上げるために必要な要素を述べている。以下に、本書の内容を見てみたい。

本文は、次の6章から成り立っている。第一章オーラル・ヒストリーとは何か、第二章歴史資料としてのオーラル・ヒストリー、第三章オーラル・ヒストリーの現代史的意味、第四章オーラル・ヒストリー・メソッド、第五章オーラル・ヒストリー万華鏡、第六章現代の意思決定にせまる、である。著者によると、本書は「オーラル・ヒストリーについての問題提起を含む概説書」(御厨, 200ページ)として執筆し、その内容は、オーラル・ヒストリーの「現代的意味を、歴史的、理論的、かつ実践的に解明」(御厨, 200ページ)したものであるという。事実、第一章でオーラル・ヒストリーの必要性が述べられ、第二章まではオーラル・ヒストリーの位置づけを歴史的に見、第三章から第六章までは筆者の体験をふまえた実践のエピソードが述べられている。そして第二章以後の各エピソードは、第一章で述べられたオーラル・ヒストリーの必要性を実証する形となっている。

著者は、オーラル・ヒストリーを「公人の、専門家による、万人のための口述記録」(御厨, 5ページ)であると説明し、物事を決定する過程を記録するためや情報公開に応えるためにも

オーラル・ヒストリーの普及を唱えている。似た様な事例から、好ましくない結果へ陥ることへの予防策を得るためにも、より多角的な視点からの記録は残さないことはない。このように読者に全体のイメージ像を示した後に、本書は具体例に入っていく展開となっている。

著者はオーラル・ヒストリーの普及を願うが、その際の注意点も挙げている。「引用者自在の玉手箱」(御厨, 70ページ)という語に象徴されるように、オーラル・ヒストリーは必ずしも事実ではなく、そこには話者や聞き手側の意図が無意識にしろ常に入ってしまうかねない危険性があるというのだ。その理由として、話者によって語られた過去は話者自身によって再構成された過去である点、「聞き手側の積極的な働きかけ」(御厨, 154ページ)がなされたことで得られた情報である点が挙げられている。

これを受けて、話者や聞き手の意図が入らないようにするための予防策も著者は随所で述べている。どのような社会状況下でのインタビューであったか、聞き手側はどのような立場でインタビューに臨んだのか、また話者はどのような社会状況にあるのか、ということ意識して解釈し、またそのことも一緒に記録することを必要としている。また著者は、インタビューを行う際には聞き手側の積極的な働きかけを必要としながらも、聞き手側は話者に極力口出しせず、話者にまかせた話の展開になることが望ましいとしている。聞き手側による発言の誘導を避けるためであろうことは、「オーラル・ヒストリーのおもしろさは、自分で書いたら出て来ないもの、あるいは自分で書いたら違う形になっているものを引き出すことにあるのだ」(御

厨, 145ページ) という言葉からも伺うことが出来るよう。

では、このように事実であるかも分からないオーラル・ヒストリーを記録する意味はあるのだろうか? この当然抱かれるであろう疑問点にも、著者は以下の様に答えている。「データが多くなればある共通性が析出されることになる。そうなればしめたもので、客観的分析に耐えうるものとなる。」(御厨, 24ページ) とのことだ。共通点から事実を拾い上げることが出来るというのだ。そのためにはより多くの証言が必要であるということになる。

以上に見てきた様に、オーラル・ヒストリーとして得られた情報の正誤や解釈の仕方には、細心の注意を払うことが必要と言える。この点については、本音を外に向けて語ろうとしない農民の声を拾おうとした大牟羅によってリアリティを持って述べられている。大牟羅は、ある質問紙調査の際に農民から「これはお上の調べでがんすべか、アメリカさんの命令だべすか? なじょに書けば良がすべ?」(大牟羅, 1955, 189ページ) という相談を受けたという事実象徴されるように「相手の御機嫌を考えて回答する」(大牟羅, 1955, 189ページ) ことが農民の常となっていると指摘している。現代においては、この傾向は少なくなってきたように評者は感じているが、それでも常に念頭に置いておくに越したことはないだろう。正確な情報を得るためにも、自身が「信頼のおける有力な『生き証人』になる」(佐藤, 2002, 158ページ) ためにも、聞き手側の意図が入らないインタビューを行う必要があるのだ。

また本書では、インタビューをオーラル・ヒストリーに仕上げる際のテープ起こしと速記者の重要性が述べられている。現場に同席した者でないと、指示語の内容、暗黙の了解で省略されている内容、沈黙に込められた意味が理解できないからだ。こうして集められた膨大なオーラル・ヒストリーだからこそ、事実を導き出すことも可能と言えるのではないだろうか。研究の方法としてのフィールドワークの手順等について明快な著作がある、社会学者の佐藤郁哉(1984, 2002, 2007) は、その著書の中でオーラル・ヒストリーを「後に続く者が分析や説明を目指した研究をおこなう際に貴重なドキュメントになることは、言うまでもない。」(佐藤, 2008, 13

ページ)と述べている。全ての研究に必要なと言っても過言ではないであろうデータ分析を行うにあたっての評価であることから、オーラル・ヒストリーはフィールドワークのみならず、分野を越えて意味と価値のあることであると言えるだろう。

さて、私事になり恐縮ではあるが、評者は現在フィールドワークのため2008年春から奄美大島へ移住する中で執筆している。評者の研究対象である機織り機の一部品であり一道具である竹箴が使われている環境に浸り、現場の声に耳を傾けるためである。常に聞き取り調査を行っているも同然の状況の中、特に気をつけていることがある。それは、竹箴の必要性を織り手に尋ねる際に、評者の相槌や返答や表情一つをとっても評者自身は必ずしも竹箴を押し進めているという印象を持っていただかないようにすることだ。なぜなら、評者は体験により培われた本音を聞きたいのであるからだ。事実、そうした配慮のもとで伺っている竹箴に付随して語られる織り手の体験談は、これが職人技と呼ばれるものかと思わされる、評者の想像を越えたものばかりである。そのため、毎日興味が尽きることはない。このような話を聞くことができるのも、本書の示す姿勢を自分なりに実行してみているからではないだろうか、ということ強く感じるようになった。語られる内容が全て本音であるかどうかは一生判明しないであろう。それでも、少なくとも記録するべきだと思わされる話は聞くことができている。

冒頭で述べた通り、本書の内容は、オーラル・ヒストリーの「現代的意味を、歴史的、理論的、かつ実践的に解明」(御厨, 200ページ) したものであるという。著者は、社会的・経済的な変化を権力構造の変化の過程に着目した研究(御厨, 1996) や、ジャーナリストが生涯をかけてどのように政治を批判したのかをまとめた著作(御厨, 1997) など、政治史を専門としている。そんな著者が本書で挙げている具体例が政治分野に偏りがあることは否めない。それでも、政治史の研究者である著者がオーラル・ヒストリーの重要性を述べていることは、総合政策科学研究科で学ぶ学生にとって実に意味深いことと言えないだろうか。学問分野を横断し、学際的な関心から問題事象に接近する総合政策科学研究科であるからこそ、現場と向き合う際に必

要な姿勢を一層の親密感を持って受け取ることが期待できるからだ。現場にオーラル・ヒストリーの有意性を訴えた点から、本書はインタビューを行いオーラル・ヒストリーとして仕上げる際の指南書の役割を果たしていると言えよう。

参考文献

- ・鳥居史絵「道具を通した伝統産業の保護に関する一考察—日本竹箴技術保存研究会の現場を通して—」『同

志社政策科学研究』（同志社大学総合政策科学会）第10巻第1号, 2008年, 197-210

- ・大牟羅良『ものいわぬ農民』岩波新書, 1955
- ・佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー』新曜社, 1984
- ・佐藤郁哉『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社, 2002
- ・佐藤郁哉『質的データ分析 原理・方法・実践』新曜社, 2008
- ・御厨貴『政策の総合と権力—日本政治の戦前と戦後』東京大学出版会, 1996
- ・御厨貴『馬場恒吾の面目—危機の時代のリベラリスト』中央公論社, 1997